

はじめに

第一章「おやさま」を終えましたので、さっそくですが、第二章「たすけ一条の道」に入ります。

以前にもお話しましたが、教祖は、たすけ一条の道として、「つとめ」と「さづけ」を教えてくださいました。今回は「つとめ」について述べていきます。

01. つとめに込められた親心

第二章「たすけ一条の道」の冒頭に掲げられている「おふでさき」をみんなで読んでみましょう。

月日にハセかいぢうゝハみなわが子 たすけたいとの心ばかりで (八 4)
「月日」というのは、ご存知のように親神様のことをいいます。
つまり、全体の意味としては「月日・親神にとっては、世界中の人間はみんな我が子である。それゆえに、どうにかしてたすけたいとばかり思っている」ということです。

皆さんは自分の両親と接するなかで、「親心」というのはいったいどのようなものなのか、想像できるのではないのでしょうか。私にも子どもが3人いますが、どの子どもも隔てなく、可愛くて仕方がないし、特に困難に直面している子がいれば、どうにかしてたすけてあげたいと思うばかりです。

同じページにはもう一首、おふでさきが引用されています。

つとめてもほかの事とわをもうなよ たすけたいのが一ちよばかりで (一六 65)
ここでは「つとめ」について触れています。

「一ちよ」は、「いちじょう」(一条)と読み、「ひとすじに、ただひたすらに」といった意味合いがあります。

つまり、このお歌は「つとめは、ただひとすじに、たすけたいとの思いから始めるのである」といわれているのです。

教祖は、ひながた 50 年の道すがらの中で、つとめの地歌である「みかぐらうた」とともに、手振りや鳴物を、順を追って教えられています。「おふでさき」を読んでも、つとめを完成させることの大切さが、何度も繰り返し教えられています。それほど、つとめには「人間をたすけたい」という親神様の親心が込められているのです。

02. 「つとめ」とは何か

では次に、「つとめ」の内容を見ていきましょう。教典に以下のくだりがあります。

このよふをはじめかけたものをなぢ事 めづらし事をしてみせるでな (六号 7)

このよふをはじめてからにないつとめ またはじめかけたしかをさめる

(六号 8)

このつとめは、親神が、紋型ないところから、人間世界を創めた元初りの珍しい働きを、この度は、たすけ一条の上に現そうとて、教えられたつとめである。即ち、これによつて、この世は、思召そのままの陽気な世界に立て替つてくる。
(『天理教教典』16 頁)

「このよふをはじめかけた」というのは、「元初まりの話」のことを指しています。

第三章「元の理」のところで詳しく話しますが、親神様はそれぞれ道具を引き寄せ、人間を創造されます。それと同じ珍しい働きを、つとめによってこの世に再び現し、治めていくといわれます。私たち人間の心が陽気に勇めば、その心を受け取られる親神様もお勇み下され、神人和楽の陽気が満ちあふれることになります。



第二章 たすけ一条の道 (I)

「教典のススメ - 教えを心の拠り所に -」 口上謹夫

このつとめは、つとめの意味を理解しやすいように、四通りの呼び名をもって教えられました。

- つとめ人衆がかぐら面をつけるところから「かぐらづとめ」
- 世界たすけのためのものであるところから「たすけづとめ」
- 陽気があふれ出るところから「よふきづとめ」
- 人間宿し込みの元なるぢばに据え置かれた「かんろだい」を芯として行うところから「かんろだいづとめ」

と呼びます。おぢばでは毎月 26 日に、「本づとめ」が行われます。それは「かぐらづとめ」と「てをどり」の2つの部分から成り立っています。

「かぐらづとめ」は、先ほども述べた通り、「かんろだい」を囲み、「元初まりの話」（元の理）によって、男5人、女5人の 10 人のつとめ人衆が、かぐら面を着け、この世元初まりに引き寄せられた方角に位置し、親神様の十全の守護の理をそれぞれ現します。（※図1参照）一手一つに心を揃え、「みかぐらうた」を唱和し、手振りを揃え、鳴物に調子を合わせてつとめます。

続いて、「てをどり」は同じく鳴物を用い、神殿の上段で、男3人、女3人の6人でつとめます。

「よろづよ八首」と、「一下り目」から「十二下り目」まであり、前半（よろづよ八首～六下り目）と後半（七下り目～十二下り目）とに分けられています。信仰者の成人の過程を手振りに現してつとめるものです。

おぢばでは毎月 26 日に月次祭が勤められ、立教の日（天保9年 10 月 26 日）を祈念して、10 月 26 日に秋季大祭が勤められ、また教祖が現身をかくされた日（明治20年陰暦正月 26 日）をしのんで、1 月 26 日には春季大祭が勤められます。

また、元旦祭が1月1日に、教祖誕生祭が4月18日に勤められます。

HAPPIST

今回の語り合いテーマ

グループを作って、次のような話をしてみましょう。

心の中で自分自身に問いかけてみるのも良いかもしれません。

① あなたが特に親心を感じたことは何ですか？

② 「かぐらづとめ」を拝したことはありますか？

「かぐらづとめ」について、人から教えてもらったことはありますか？

③ なぜ、教祖はおつとめを教えられたと思いますか？



Happistでも
読むことができます！

